

国際科学史会議を終えて

藪 内 清*

この夏、第14回国際科学史会議が日本で開かれた。これまでの会議は、一度イスラエルで開かれたことを除くと、すべてヨーロッパとアメリカで行われてきた。東アジアで開かれた最初の会議であったが、かなり努力したにもかかわらず、ついに中国からの参加を得られなかったのは残念であった。会議は8月19日から27日までで、その前半は東京、25日を旅行日として会場を京都に移し、国際会議場で26日のシンポジウムを行い、27日はエキスカージョンと閉会式で、実質的な討議は7日間であった。欧米の学者からみれば、日本への旅行は何としても速く、暑い盛りに加えて、日本の物価高はいまでは世界的に有名である。こうした悪条件からみて、海外からの参加者はあまり多くを期待できないと思われた。しかし蓋を開けてみると、海外から32か国の学者200名以上（同伴者をふくむ）の参加者がおり、まずまずの成功であった。日本の天文学会もまだ国際会議を開いておらない状態で、国際会議の開催はいろんな面倒が附随し、なかなか容易なことではない。ことに科学史のばあいは、自然科学と歴史科学の領域にまたがっており、それに地域的な研究をやっている学者が比較的多く、はたして議論がうまくかみ合うかが心配され、従ってどれだけ学問的な成果があがったかはなお今後の問題として検討されることであろう。

会議はずいぶん欲張ったものであった。10の部会と8のシンポジウムが7日間のあいだに、ぎっしりと埋められた。19日の開会式には、フランクフルト大学のウィリー・ハルトナー教授と湯川秀樹博士の講演があり、午後からはさっそく部会がはじまった。部会としては、今度の会議で新しく Science in Non-Western Traditions というのが設けられ、アラビア、インド、中国、日本などのアジア地域に関する研究がここで発表された。天文関係の論文は主として「物理と天文学史」の部会、それにこの「非西洋の伝統での科学」の部会とで発表された。いま発表を予定されていた天文関係の論文を挙げると、

N.S. Hetherington (U.S.A.): Edwin Hubble and the Development of Modern Cosmology

M. Uchiyama (Japan): On the Calendar of the "Nihon Shoki"

S. Imoto (Japan): Re-studying on the Star Atlas of 28 Constellations drawn on the Wall of the Takamatsu Mound

O. Gingerich (U.S.A.): A Census of Copernicus'

* 電谷大学

De Revolutionibus

E. Rybka (Polland): Copernican Problems in *Epitome Astronomiae Copernicanae* of Johannes Kepler

E. Forbes (U.K.): John Flamsteed's Gresham College Lectures in Astronomy (1681—84)

A. Sayili (Turkey): An unknown Tract of al-Fārābi

A. Brioux (France): Note sur un Astrolabe nord sud

M. Souissi (Tunisia): Apport original de l'Astronomie Arabe

B.A. Rosenfeld and A.K. Tagi-Zade (USSR): Mathematical Methods used for designing Astronomical Instruments in the Arab Countries, Iran and Central Asia

予定者の中には、一、二出席されなかった学者もあった。このほかペイルートにあるアメリカ大学の E. S. Kennedy 教授が飛び入りでアラビアの天文学者アル・ビールーニの仕事を紹介した。

26日に京都で行われたシンポジウムの1つは、「日本と中国における社会と科学」というのであったが、ここでも次の2つの天文関係の論文が読まれた。

Y. Maeyama (F.R.G.): The Astronomical Data of Ancient China (*Han*) and their Social Implication

W. Hartner (F.R.G.): Some news on Shang-Yin
ハルトナー教授の論文は、Shang-Yin すなわち商一般時代における日月食の記録を検討されたもので、甲骨文の1字についての新解釈から、食の起る時間が確定され、それによって食が起った年次がいっそう詳細に決定し得ることになったものである。さらにまた日食、月食と明記されていないけれども、多くの犠牲を捧げる行事が行われている時には、これも日月食があった事実を裏書きするものとして、従来知られていたよりもはるかに多くの日月食の記事を、甲骨文より見出したとされている。殷の滅亡、すなわち周初の年代については、有名な甲骨学者董作賓氏の説（—1110）をしりぞけ、—1064年を採用すべきことを提唱した。新城先生が得られた結果が—1065年であることをハルトナー教授に伝えたところ、全くそれを知らなかったというのが、教授の返事であった。しかしもちろんこの研究はなお十分な検討が必要であると思われる。

なお次回国際科学史会議は、3年後の1977年にイギリスのエディンバラで行われることを附記しておく。